

現代日本語における複合動詞と「V1+V2」型複合動名詞との 意味形成の差異について¹

—生産性を手がかりとして—

李慧

lihui13041002@gmail.com

キーワード：複合動詞 「V1+V2」型複合動名詞 他動性調和原則 語彙概念構造
生産性

要旨

本稿は、現代日本語における複合動詞（例：「切り倒す」）と「V1+V2」型複合動名詞（例：「立ち読み」）の生産性の面での違いを示し、この違いを引き起こす要因を考察したものである。複合動詞と「V1+V2」型複合動名詞は、V1 と V2 の意味関係によって、手段関係、付帯状況関係、並列関係、原因関係、補文関係の5つのタイプに分けられる。それぞれの意味関係を表す語は生産性（＝実際に存在する語の多さ）の高さが異なる上、生産性の高さが逆になる傾向が見られる。本稿はこのような傾向を手がかりとして、複合動名詞における一番生産性が高い「付帯状況関係」のタイプを対象を絞り、複合動詞の「付帯状況関係」のタイプとの対照を通じて、両者の違いに対する説明を試みた。アプローチとしては、動詞の意味構造を一般化できる語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure, 略として LCS）の枠組みを利用した。複合動詞と複合動名詞の両方とも「他動性調和原則」を満たしているが、複合動詞の V2 には様態が指定されていないのに対して、複合動名詞の V2 には様態が指定されているということを明らかにした。本稿は、複合動詞と複合動名詞はいずれも複合語の形成における項構造レベルの制約を受けているが、意味構造レベルの違いによって両者の違いがもたらされると主張する。これは、日本語の複合動名詞の形成の動機付けが何なのかという問題の解決にもつながっている。

1. 問題提起

現代日本語において、2つの動詞要素（以下、それぞれ V1、V2 とする）から成立する複合語には、以下のような現象が観察できる。

¹ 本稿の執筆にあたって、貴重なコメントとご助言をくださった伊藤たかね先生に深く感謝を申し上げたい。また、貴重なご助言と励ましのお言葉をくださった西村義樹先生にも感謝の意を表したい。本稿の内容は伊藤たかね先生、杉岡洋子先生をはじめとする Lexical studies circle (LSC)にて発表する機会をいただいた。その際にご意見をくださった方々にお礼申し上げる。陳奕廷先生との議論を通じて、大いに刺激を受けた。井川詩織、峰見一輝、三田寛真、岩崎剛毅の各氏から原稿を丁寧にチェックしていただいた。データの容認性判断にあたって、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻の院生の皆様から多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。本研究は、科学研究費助成金（特別研究員奨励費 19J12422）による研究の成果の一部である。

- (1) 貸し出し-貸し出す-貸し出しする
 (2) 立ち読み-*立ち読む-立ち読みする (* は容認不可能であることを示す)

「立ち読み」は、「スル」形を取ることによって動詞述語として使われるという点で、「貸し出し」と共通している。しかし、「貸し出し」には対応する複合動詞「貸し出す」があるが、「立ち読み」に対応する複合動詞「*立ち読む」は容認されない。このように、対応する複合動詞を持つかどうかという点で、「立ち読み」は「貸し出し」と対立している。このような形式上の違いは理論的にどのレベルの違いなのか、また何によってもたらされるのかが問題になる。本稿は、「立ち読み」のような「スル」形を取るが、複合動詞に使われていない語を複合動名詞と呼ぶことにする。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節では、本稿で扱う研究対象およびデータの抽出方法を紹介する。次に3節、4節では、先行研究および理論的枠組みを説明する。5節では、V1とV2の意味関係が異なるタイプの語は生産性の高さが逆の傾向を示すことを明らかにする。6節では、複合動名詞における一番生産性が高いタイプに対象を絞って、生産性の違いが何によってもたらされたかを語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, 略として LCS) のアプローチから分析する。最後に、7節では、生産性の違いは、項構造レベルの違いではなく、意味構造の違い、すなわちV2は様態が指定されていることによってもたらされると主張する。

2. 研究対象およびデータの抽出方法

本研究で扱う複合動詞と「V1+V2」型複合動名詞はそれぞれ表1に示したとおりである。

表1. 本研究で扱う研究対象

タイプ	定義	本研究で扱う対象	例
複合動詞	二つの動詞 (V1 は形態的に動詞連用形となる) が結合して一つの動詞としての意味・用法を持つに至ったもの。	語彙的複合動詞のみ	押し開ける、揺り起こす、殴り倒す、蹴り殺す
「V1 + V2」型複合動名詞	二つの動詞連用形が結合して一つの動名詞としての意味・用法を持つに至ったもの。	対応する複合動詞をもっていないが、「スル」をつけて1つの述語と見なされるもののみ	立ち読み、開け閉め、持ち逃げ、討ち死に

2.1. 「V1+V2」型複合動名詞

「V1+V2」型複合動名詞に対して、本稿の捉え方を説明する。西尾（1961）、Tagashira and Hoff（1986）では、「V1+V2」型複合名詞に対応する複合動詞があるかどうかによって、複合動詞と複合名詞を包括的に捉えた。しかし、両氏とも、「スル」をつけて動名詞になるものに注目していなかった。本稿では、収集したデータへの観察を通じ、「V1+V2」型複合名詞形を取る複合語には、動詞形とスル形があるかどうかによって、表2のような4つのタイプに分けられる。

表2. 「V1+V2」型複合名詞に対する分類

分類	例
A「動詞形あり、スル形あり」類	ok 貸し出し、ok 貸し出す、ok 貸し出しする
B「動詞形あり、スル形なし」類	ok 掃き出し、ok 掃き出す、*掃き出しする
C「動詞形なし、スル形あり」類	ok 立ち読み、*立ち読む、ok 立ち読みする
D「動詞形なし、スル形なし」類	ok 浮き彫り、*浮き彫る、*浮き彫りする

本稿は、「スル」形を取るが、対応する複合動詞をもっていないという点に着目するため、Cタイプのみを複合動名詞として扱う。

2.2. 複合動詞

影山（1993）は、複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分ける。語彙的複合動詞とは、「押し開ける」、「揺り起こす」のように、一語としてのまとまりが強く、意味の慣習化と語彙的な結合制限という典型的な「語」の特徴を備えているものである。統語的複合動詞とは、「食べかける」、「食べ過ぎる」のように、意味の透明性と生産性において、典型的な語より文や句に近い性質を備えており、意味の慣習化は見られないものである。本稿では、語彙的複合動詞を研究対象とする。というのは、語彙部門で形成された「V1+V2」型複合動名詞を主な研究対象とし、それと比較するためである。統語部門で形成された統語的複合動詞は扱わない。また、複合動詞の中には、表2に示したように、A、Bタイプが含まれる。このほかに、「*殴り倒しー殴り倒すー*殴り倒しする」のように、対応する名詞形がない語もある。本稿では、語彙的複合動詞であれば、こういう区別に関係なくすべて対象とする²。データに関しては、先行研究（影山（1993）、松本（1998）、由本（2005、2013）など）及び国立国語研究所によって開発された『Web データに基づく複合動詞用例データベース』³を利用する。

2.3. Cタイプの複合動名詞の抽出方法

² 複合動名詞のうち、Aタイプは考察対象としないが、複合動詞のほうはAタイプを考察対象とするのは整合性が欠けているという指摘があるが、本稿は、複合動詞の各意味関係のタイプの生産性に着目するため、Aタイプを除くとしても、複合動詞の生産性の傾向に影響を与えていないと思われる。よって、Aタイプも複合動詞の考察対象としている。

³ <http://csd.ninjal.ac.jp/comp/>

2.3.1. A～D タイプの語の抽出

まず、『日本語基本動詞用法辞典』に収録されている和語単純動詞 234 語の連用形を後項要素（例えば、読み（読む）、隠れ（隠れる））として、逆引き辞典（『逆引き広辞苑』（第五版）と『日本語逆引き辞典』）から 1194 語の複合語（A～D タイプに当たる）を抽出する。

次に、この 1194 語の複合語に動詞形があるかどうかを調べる。『新明解国語辞典』（第六版）、『岩波国語辞典』（第七版）、『スーパー大辞林』（3.0）の 3 種類の国語辞典で確認する⁴。結果は表 3 のようになった。

表 3 国語辞典から抽出した「V1+V2」型複合語

タイプ	語数	例
「動詞形あり」(A、B タイプ)	2 語	「逃げ隠れ」(逃げ隠れる)、「出会い」(出会う)
「動詞形なし」(C、D タイプ)	4 語	「立ち読み」(*立ち読む)、「泊り掛け」(泊り掛ける*)

2.3.2. C タイプの語となるかどうかの判断

a. コーパスでの確認

さらに、コーパスで「スル」をつけてサ変動詞として使えるかどうかを調べた。国語辞典から抽出した「動詞形なし」複合動名詞（C、D タイプ）の 4 語に対して、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を利用し、「複合動名詞+スル」の形で使われる用例があるかどうかを確認した。「スル」形の用例がある場合、「スル形あり」の類（C タイプ）に入れ、「スル」形の用例がない場合、「スル形なし」の類（D タイプ）に入れた。対応する複合動詞をもっていないが、「スル形あり」（C タイプ）類は 155 語であった。

b. 母語話者の容認性判断

最後に、抽出した 155 語に対し、それが自然に使われるかどうかについて、8 人の日本語母語話者⁵の容認性判断⁶を行った。容認性判断において、「自然だと思う」と答えた人が 4 人以上（4 人を含む）である 72 語を、分析の対象とした。具体的なデータは、第 5 節を参照されたい。

3. 先行研究

今まで多くの研究者が様々な角度から複合動詞に関する研究を行ってきた。だが、対応する動詞形を持っていない「V1+V2」型複合動名詞の角度から分析したものは、管見の限り、少ない。

⁴ いずれかの辞典に対応する複合動詞が存在するなら、「動詞形あり」の複合名詞とし、どの辞典にも対応する複合動詞が存在しない場合、「動詞形なし」の複合名詞として扱う。

⁵ 調査の協力者は、学部生、大学院生である。

⁶ 容認性判断調査において、以下のような基準で判断してもらった。「自然だと思う」（自分が使う、または自分は使わないけど他の人が使っているのを聞いたことがある）、「不自然だが許容できる」（言おうと思えば許容できる）、「言わない」の三つである。「自然だと思う」と答えた人が 4 人以上（4 人を含む）である場合、「V1+V2」型複合名詞の研究対象語とした。

3.1. 複合動詞

複合動詞の結合条件および分類に関する研究は大きく分けて二つの流れがある。一つは寺村 (1969) を出発点として長嶋 (1976)、山本 (1984) につながる記述的な視点に立つ研究の流れである。もう一つは、影山 (1993) による、抽象性の高い意味論 (「概念意味論」) の枠組みでの分析であり、その流れは、由本 (1996、2005)、松本 (1998) へと批判的に継承されている。すなわち「寺村－長嶋－山本」と「影山－由本－松本」の二つの流れである。本稿に関連があるのは「影山－由本－松本」の流れである。

複合動詞の V1 と V2 の間の意味関係のパターンについて、第 5 節と大きくかかわる研究に触れておく。影山 (1993、1999)、松本 (1998)、由本 (2005) などの研究では、語彙的複合動詞を構成する 2 つの動詞 (V1 と V2) の意味関係を表 4 のようにパラフレーズの方法で分類している。

表 4. 複合動詞における V1 と V2 の間の意味関係のパターン

意味関係タイプ	パラフレーズ	例
並列関係	「V1 たり V2 たり」	泣き叫ぶ、忌み嫌う
付帯状況 (様態)	「V1 ながら V2」、「V1 のように V2」	持ち寄る、遊び暮らす
手段関係	「V1 によって V2」	切り倒す、叩き潰す
原因関係	「V1 ため V2」、「V1 の結果、V2」	溺れ死ぬ、崩れ落ちる
補文関係	「V1 という行為／出来事を (が) V2」	見逃す、聞き落とす

影山 (1999 : 195) よりまとめたもの

複合動詞の結合条件は従来盛んに議論されてきた。主に、項構造の合成 (影山 1993) と意味構造の合成 (松本 1998、由本 2005; 2013) からのアプローチがある。本稿は意味構造の合成からのアプローチをとる。詳細は 6 節で説明する。

3.2. 複合動名詞

「V1+V2」型複合動名詞は、複合動詞ほど生産性が高くない。「V1+V2」型複合動名詞を本格的に複合語として扱う先行研究は、主に石井 (1983、1984)、嶋田 (1989)、鈴木 (2014、2017) などが挙げられる。

3.3. 先行研究の問題点および本稿の立場

先行研究で提起された複合動詞の「他動性調和原則」、「主語一致制約」の結合条件を、「V1+V2」型複合動名詞も満たしている。

(3) 「他動性調和原則」：日本語の複合動詞研究に大きな影響を与えてきた影山 (1993) によると、語彙的複合動詞は項構造のレベルにおいて複合が起こるといふ。項構造のレベルで生成

される複合動詞は、このような各動詞の項構造に基づき、他動性調和原則と呼ばれる制約に従うとされる。これは、外項を取る動詞（他動詞と非能格動詞）同士か、外項を取らない動詞（非対格動詞）同士の組み合わせしか許されない、というものである。

(4)「主語一致原則」：主語一致の原則は、複合動詞においては二つの動詞の主語として実現する項（行為者、使役者、それがなければ有情者、移動物など）が同定されなければならないという制約である（由本（1996、2005）、松本（1998））

例えば、「立ち読み」では、「立つ」は非能格自動詞で、「読む」は他動詞で、両方とも外項を主語に取っているため、「他動性調和原則」を満たしている。また、外項が指す主語も同じであるため、「主語一致制約」も満たしている。よって、これらの制約によって両者の違いを説明することはできない。

それに対して、本稿は「V1+V2」型複合動名詞と複合動詞の各意味関係のタイプに対応している生産性の面を手がかりとして、生産性の高さに影響する要因を動詞の語彙意味からの説明を試みる。

4. 理論的枠組み

本稿では、語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure, 略として LCS）のアプローチを利用する。動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表した構造を LCS という。LCS は、Rappaport & Levin (1988)、Jackendoff (1990)などで提唱されている考え方で、意味構造の骨格となる鋳型の部分と、具体的な内容を表す部分とで構成される（影山 2008 : 261）。また、LCS は、基本的には単語の概念的意味を示すのであるが、単にそのような静的表示であるだけでなく、組み換えや合成といった動的な操作を受けるという点で、文法内の 1 つの表示レベルと位置づけることができる。

4.1. LCS で表せる動詞の意味及び制約

LCS の具体的な表記は研究者によって様々である。本稿は Rappaport Hovav & Levin (1998)、影山 (1996、1999、1997、2001) を参考にし、Vendler の動詞 4 分類を発展させ、語彙概念構造で動詞の基本的なタイプを表 5 のように表す。

表 5. 語彙概念構造で表す Vendler の動詞 4 分類

動詞タイプ	LCS 表記	表せる意味	例文
状態動詞	[y BE AT z]	y が z という場所（あるいは状態）にある	太郎は研究室にいる
活動動	[x ACT (ON y)]（自動	x が y に対して、ある行為や活	太郎は布団をたたく

詞	詞もある)	動、働きかけをする	
到達動詞	[BECOME[y BE AT z]]	変化 (BECOME) が起こって、y が z の状態/位置 (BE AT) になる	ドアが開く
達成動詞	[[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT z]]	x が y に働きかけることによって、変化が起こり、最終的に y が z の状態となる	太郎はドアを壊した

影山 (1999、2001) に従うと、これらの表記において、大文字の英単語で表されているのは <使役> や <変化> といった概念で、意味述語と呼ばれている。x、y、z は変項と呼ばれ、具体的な文においては項 (主語や目的語) がそれらの位置に現れる。通常、ACT の主語 x は動詞の外項に、BE の主語 y は内項に対応している。LCS で表せる最大の範囲は達成動詞の意味範囲である。つまり、最大限、1 つの上位事象と 1 つの低位事象を合わせた使役構造にまで拡大できる。

また、影山 (1996 : 90) では、統語構造との対応関係により、語彙概念構造に関して非対格性の観点から次のような指摘がなされている。状態と状態変化は人間や外的原因が関与しない自然発生的な出来事ないし状態を意味しているから、統語構造では非対格構造に対応すると考えられる。他方、継続活動は意図的に活動を持続するようなエネルギーが必要であり、多くの場合、そのエネルギーは動作主によって行使されるから、このグループは統語構造では非能格構造に該当するという。この 2 つのタイプの構造を基本として、両者を合体したものが使役構造の達成動詞であるとする。

4.2. 動詞のアスペクトの判断基準

語彙概念構造は完了・未完了といった動詞の時間的なアスペクトの情報を取り入れ、動詞の意味構造を表示する。したがって、動詞の意味構造を表す場合、まず動詞のアスペクトを確認しなければならない。本稿では、動詞のアスペクトの判断テストを以下のように提示しておく。第一に、変化結果があるかどうかは、日本語では次のような「た」の用法に反映される。「た」が変化動詞に付いた場合は、変化した後の状態をさすが、変化を伴わない動詞 (6) に付くと、日本語では「結果状態」ではなく単純な「過去」としての解釈しかできない。

(5) 変化自動詞 : 腫れた足、腐った卵、縮んだ服、色あせた栄光、破裂したパイプ

(6) 活動自動詞 : #泳いだ少年、#踊った少女、#働いた男 (#印は「過去」の解釈なら可能)

影山 (1999 : 76)

第二に、「結果述語」の可能性が見分けの基準となる。

る例があれば、また個々の例に対して検討する。

5. 複合動詞と「V1+V2」型複合動名詞との生産性の異なる傾向

この節から、「V1+V2」型複合動名詞に言及する場合、すべて C タイプを指す。「生産性」の捉え方は、研究者によって異なる。大きく分けて、①実在の語 (existing words) にはどのような語が多くあるのかという観点、②新しい語 (potential words) をどれだけ作ることができるかという観点からの定義となる。本稿では Bauer (2001) を参考に、「生産性」という用語を、「どれだけ多くの実在語 (“existing words”) が用いられているか」 (=type frequency、異なり語数の多さ) という意味で使うこととする。

複合動詞は、松本 (1998)、由本 (2005、2013)、陳 (2015) でも触れられているように、V1 と V2 の意味関係の違いや動詞の意味クラスによって生産性が異なるといわれている。生産性について、これらの先行研究は見解が一致し、異なり語数という意味で生産性を用いている。陳 (2015) では、『Web データに基づく複合動詞用例のデータベース』に収録された 3514 語を対象として調査を行っている。その結果は表 6 のようになる。

表 6. 複合動詞の意味関係のタイプにおける生産性の違い

意味関係	生産性の傾向
並列関係	低い (153 語、4.36%)
付帯状況関係	低い (147 語、4.18%)
手段関係	一番高い (1732 語、49.29%)
原因関係	低い (588 語、16.73%)
補文関係 ⁷	高い (894 語、25.4%)

陳 (2015) よりまとめたもの

表 6 からわかるように、語彙的複合動詞では、V1 と V2 が「手段関係」にある語は生産性が高い。また、「並列関係」、「付帯状況関係」は生産性の低さが見受けられる。

本稿では、先行研究に挙げられたパラフレーズの方法で分類するやり方は、「V1+V2」型複合動名詞の場合にも適用できると考える。というのも、複合動詞の意味関係と「V1+V2」型複合動名詞の意味関係の判断とは共通していると思われるからである。本稿では、「生産性」という基準を提示し、表 3 にあがっているパラフレーズを利用し、複合動名詞における V1 と V2 の意味関係の分類した上で、「V1+V2」型複合動名詞を表 7 のように分類した。

⁷ 先行研究によって、「補文関係」に対する捉え方が異なる。陳 (2015) は V2 を補助動詞 (e.g., 呆れ果てる、打ち捨てる)、背景-具現型 (e.g., 聞き漏らす、見逃す) に分けている。

表 7. 「V1+V2」型複合動名詞の意味関係のタイプと生産性との関係⁸

意味タイプ	語	生産性
並列関係	開け閉め、上げ下ろし、上がり下がり、上げ下げ、上り下り、行き来、浮き沈み、売り買い、送り迎え、貸し借り、切り張り、出し入れ、出入り、伸び縮み、抜き差し、乗り降り、見え隠れ、見聞き、満ちかけ、寝起き、やり取り、読み書き	二番目に高い(22語、30.6%)
付帯状況 (様態)	押し洗い、重ね着、崩し書き、切り売り、しゃくり泣き、添い寝、添え書き、叩き洗い、叩き売り、立ち飲み、立ち泳ぎ、立ち食い、立ち読み、立ち聞き、掴み洗い、飛ばし読み、投売り、盗み聞き、盗み撮り、量り売り、走り書き、走り読み、放し飼い、拾い読み、踏み洗い、まつり縫い、回し飲み、持ち逃げ、揉み洗い	一番高い (29語、40.3%)
手段	買い食い ⁹ 、着痩せ、焼き討ち	低い (3語、4.2%)
原因	討ち死に、寝冷え、ひき逃げ	低い (3語、4.2%)
その他	当て逃げ、受け売り、卸売り、追い炊き、買い置き、買いだめ、食い溜め、食い逃げ、出稼ぎ、寝泊り、乗り逃げ、寝だめ、振り逃げ、もらい泣き、焼き増し	比較的低い (15語、20.8%)

表 7 からわかるように、「V1+V2」型複合動名詞の各意味関係のタイプに応じた生産性の相違は以下ようになる。

(13) 「V1+V2」型複合動名詞の 72 語の中で、「付帯状況」は 29 語あり、比率が一番高い。「付帯状況」の関係を表す語の生産性が高いといえる。

(14) 並列関係は 22 語あり、2 番目に数が多いタイプである。しかも、V1 と V2 がほとんど反義の語になるという特徴が顕著である。

(15) 「手段関係」、「原因関係」のタイプは「付帯状況」タイプと「並列関係」タイプと比べて、比率がかなり低い。つまり、生産性が低いという特徴がある。

⁸ この表は、あくまでも母語話者の間に容認性が高い語を取り上げたものである。日本語におけるすべての「V1+V2」型複合動名詞を網羅するわけではない。

⁹ 家庭（や学校給食）で与えられるものを食べるのが「正しい食」で、それ以外のものを食べるということだと思われる。この点から見れば、「買い食い」には、「買い」の表す意味は単なる買う行為というより、むしろ 1 種の手段だと理解するのが適切だと思われる。

これまで述べた、複合動詞と「V1+V2」型複合動名詞のそれぞれの意味関係に対応する生産性は、表8のようにまとめられる。「原因関係」のほか、「付帯状況」、「並列関係」、「手段関係」、「補文関係」の意味関係のタイプにおいて、複合動詞と複合動名詞の生産性は逆のパターンになる傾向があると見られる。

表 8. 意味関係のタイプにおける生産性の違い

複合語 意味関係	複合動詞	「V1+V2」型複合動名詞
並列関係	生産性低い	生産性高い
付帯状況	生産性低い ¹⁰	生産性一番高い
手段関係	生産性一番高い	生産性低い
原因関係	生産性低い	生産性低い
補文関係	生産性高い	生産性低い

本稿では、「V1+V2」型複合動名詞の生産性が一番高いタイプに対象を絞り、複合動詞の対応するタイプとの対照を通じて、LCSの結合からその違いに対する説明を試みる。

6. LCS から見る複合動詞と複合動名詞の生産性の高低

複合動名詞のLCSの結合に関して、以下のような立場がある。伊藤・杉岡(2002)は、「立ち読み」のような複合動名詞を、動詞連用形を後項要素とする複合語(「ワープロ書き、手作り、水洗い、早食い、若死に、石造り、板張り」)と並行に扱っている。これらの語において、前項は後項の付加詞として後項の動詞連用形と複合するとしている。また、動作性名詞になるか、状態述語になるかは、結合する付加詞が動詞のLCSのどの下位事象を修飾するかによって決まると主張している。例えば、活動動詞では、「道具や様態を表す付加詞とともに」という意味を持つ、次のような複合語が可能である。

(16) [道具 - ACT ON y] 「ある手段で／ある様態で～する」

水洗い、ブラシ洗い、雑巾ぶき、塩もみ (する)

(17) [様態 - ACT (ON y)]

一人歩き、よちよち歩き、早歩き、ばか騒ぎ、早食い (する)

伊藤・杉岡(2002:118)より改変

このように、付加詞はその意味役割に基づいて、LCSの異なる基本述語(ACT/BECOME/BE)を含む事象によって選択されると述べている。このような分析によって、「立ち読み」が動作性名詞になるという事実を説明することはできると思われる。ただし、そこで挙げられた付加詞

¹⁰ 付帯状況関係に属している語のうち、V2が移動や位置変化を表す場合の生産性が高い。

は名詞、副詞、形容詞のような例がほとんどである。なぜ動詞要素の「立ち」も同様に扱うことが可能なのかについては論じられていなかった。

本稿では、複合動名詞においても、複合動詞と同じように LCS が「単一の事象」を表現しているということを前提としている。その LCS は、元になる二つの動詞の LCS の合成によって得られると考える。LCS の記述に制約を課すことで、どのような組み合わせの場合に複合動名詞が形成可能か、またその結果、生じる複合動名詞がどのような性質を持つかについて、予測力を持たせることができると思われる。

本節では、まず 6.1 節で先行研究において論じられた生産性が高い複合動詞の LCS の結合と統語構造との対応関係をまとめる。次に、6.2 節で様態動詞と結果動詞の違いという観点から複合動詞と複合動名詞の LCS の結合を概観する。最後に、6.3 節で「付帯状況」タイプの複合動詞と複合動名詞の LCS を対照し、その違いについて論じる。

6.1. LCS 結合の仕方と統語構造との対応関係

影山 (1996、1999、2008)、由本 (2005、2013) などでは、LCS の結合における操作が盛んに議論されている。語彙的複合動詞の複合は、2つの動詞の LCS の結合を前提として考えられている。

由本 (2013) は、語彙的複合動詞の中で、どのようなものの生産性が高くなっているかを V1 と V2 の意味関係から分析した。由本 (2013 : 114) は、生産性の高い語彙的複合語は、V1 が V2 の意味を補充するような意味関係であると指摘している。また、V1 と V2 の LCS の結合は (18) のようになると分析している。この場合の LCS の操作を「補充操作」と呼ぶことにする。

(18) 補充操作 V2 の LCS 内の原因事象をより詳細に特定する情報として V1 の LCS が代入される操作である。

(19) 例：「たたき壊す」

V2 [[x ACT<MANNER 未指定>-ON y]¹¹ CAUSE [y BECOME [y BE AT-BROKEN]]]

V1 [x ACT-ON<hitting> y]

由本 (2013 : 113) より改変

V2 「壊す」の様態 (MANNER) が指定されていないので、「壊す」には V1 の LCS を代入できるスロットがある。V2 「壊す」の LCS 内の原因事象をより詳細に特定する情報として、V1 「たたき」の LCS が代入される。このように、V1 と V2 の LCS は 1 つの使役連鎖を作り、「たたき壊す」という一つの達成事象になる。

また、由本 (2013) では、生産性は高くないが容認される複合動詞が形成される場合は、V1

¹¹ [x ACT<MANNER 未指定>-ON y]の中の<MANNER 未指定>の部分は、筆者が補ったものである。

の LCS は V2 に新たに付加される形となると論じられている。由本（2013：118）は、クオリア構造¹²を導入した上で、V1 が V2 の主体役割や形式役割の情報を付加して矛盾がないような場合は、生産性は高くないが容認される複合動詞だと述べている。以下のような例が挙げられる。

(20) 例：「溺れ死ぬ」

構成役割：_{v2}[y BECOME [y BE AT-DEAD]]

主体役割：_{v1}[y BECOME [y BE AT-DROWNED]]¹³

由本（2013：114）より引用

V1 が「原因」を表すこのタイプでは、V2 が非対格自動詞であるため、V2 の LCS には LCS が代入できるスロットがない。そこで、この場合も V1 の LCS は主体役割に付加されることになると考えられる。

以上に述べたように、LCS の合成と生産性の対応関係をまとめると、表 9 のようになる。

表 9. LCS のと生産性の対応関係

LCS の構成	意味関係	例	意味構造の特徴	生産性	他動性調和原則 ¹⁴
補充操作	手段関係	「切り倒す」	V1 が V2 の様態情報を指定している。V1 が活動動詞（他動詞）、V2 が達成動詞	比較的高い	満たしている
	付帯関係	「這い寄る」			
付加操作	付帯状況関係	「咲き狂う」	V1 が活動動詞（自動詞）、V2 が到達動詞	比較的低い	満たしていない
	原因関係	「泣き濡れる」 「飲みつぶれる」 ¹⁵	V1 が達成動詞（活動動詞）で、V2 が到達動詞		

¹² クオリア構造とは、その単語が表す意味に含まれる世界知識に属するような情報を以下のような 4 つの役割に分類し、それらを形式的に記述したものである。

形式役割：物体を他の物体から識別する関係

構成役割：物体とそれを構成する部分の関係

目的役割：物体の目的と機能（習性）

主体役割：物体の起源や発生に関する要因（小野 2005：24）

¹³ ただし、*drown* は「死んだ」結果を含意しているが、「溺れる」は「死んだ」結果まで含意していない。証拠としては、結果キャンセル文にすると、「*He drowned, but he didn't die」は容認不可能であるのに対して、「彼が溺れたが、死んでいなかった」は容認可能である。よって、「溺れる」の LCS の表記が不適切だと思われる。

¹⁴ 実例を観察した結果によるのである。

¹⁵ このほかに、「非能格+非対格」、「他動詞+非対格」の組み合わせの例がある。それぞれは a) 歩き疲れる、遊び疲れる、泳ぎ疲れる、立ち疲れる、座り疲れる、しゃべり疲れる、鳴きくたびれる、走りくたびれる、泣き濡れる、泣き沈む、b) 読み疲れる、待ちくたびれる、飲みつぶれる、食いつぶれる、聞きほれる、見ほれる 松本（1998：49）

このような生産性の違いは項構造の制約である「他動性調和原則」によっても裏付けられる。第4節で述べたように、状態動詞、到達動詞は非対格構造に対応するのに対して、活動動詞は非能格構造に該当すると考えられる。一方で、達成動詞は使役構造を含んでいる他動詞である。影山（1993）では、原因関係タイプの複合動詞は、「他動性調和原則」に反する数少ない組み合わせであると指摘されている。本稿では、「付加操作」に属している「付帯状況関係」の語を観察し、これらのほとんどが「他動性調和原則」に反する容認されない組み合わせだと確認できた。つまり、LCSの構成の関係から見れば、「補充操作」が適用される語は「他動性調和原則」を満たしており、生産性が高いが、「付加操作」が適用される語は「他動性調和原則」に反する容認されない組み合わせのほうが多く、生産性が低い。

手段関係を表す複合語において補充操作が可能なのは、スロットがあいているからである。付帯状況（やそれ以外）の場合はLCSにスロットがないから補充のしようがないと思われる。このように、複合動名詞において生産性の高い「付帯関係」と「並列関係」の語は、LCSの合成において「付加操作」が適用されると考えられる。表9に示したように、「付加操作」が適用される場合、「他動性調和原則」を満たしていないという事実が観察された。これに基づき、複合動名詞において、「付加操作」が適用されるほうは生産性が高いため、「他動性調和原則」に反する容認されない組み合わせのほうは生産性が高いはずだと予測できる。そこで、今回集めた複合動名詞を確認しておく。動詞を、活動動詞、達成動詞、到達動詞、状態動詞の4種類に分類すると、動詞複合語のパターンは全部で16通りあることになる。しかし、実際にはそれらが均等に存在しているわけではない。

表 10. 複合動名詞と「他動性調和原則」

意味関係	「他動性調和原則」を満たしているタイプ	「他動性調和原則」を満たしていないタイプ
並列関係	達成+達成：10語、到達+到達：10語 活動+活動：2語 (22語)	なし
付帯状況関係	達成+達成：8語、活動+活動：7語 活動+達成：7語、達成+活動：1語 (23語)	到達+達成：3語 到達+活動：3語 (6語)
手段関係	到達+到達：1語、達成+達成：1語、 達成+活動：1語 (3語)	なし
原因関係	活動+到達：2語、到達+到達：1語 (3語)	なし
その他	達成+達成：5語、活動+達成：2語、達成+活動 2語 (9語)	到達+活動：3語 到達+達成：2語 達成+到達：1語 (6語)

表 10 に示したように、複合動名詞も、そのほとんどが「他動性調和原則」を満たしている。「並列関係」に属している語は、アスペクトが一致している語の組み合わせになる。「付帯状況関係」や「手段関係」、「原因関係」、その他のタイプにおいても、「他動性調和原則」を満たしている語が圧倒的に多い。ただし、「他動性調和原則」に反する動詞の組み合わせが複合動名詞になる語も見られる。以下では、「他動性調和原則」を満たしている複合動名詞が、複合動詞とどのように異なっているかについて考察していく。

6.2. 様態動詞と結果動詞の観点から

様態動詞は、様態を単語の意味として指定している（含意）が、結果については指定していない。たとえば、「殴る、掃く、走る」などが挙げられる。結果動詞は結果を語の意味として指定しているが、様態については指定していない。例として、「殺す、壊す、開く」などが挙げられる。(21) は結果動詞の例である。V2 の「壊す」は様態を指定しておらず、V1 の「叩く」は様態が含意されているため、「壊す」の様態を補充することができると考えられている。

(21) 例：「たたき壊す」((19) を再掲載)

V2[[x ACT<MANNER 未指定>-ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-BROKEN]]]
 ↑
 V1[x ACT-ON<hitting> y]

由本 (2013 : 113) より改変

Levin & Rappaport Hovav の一連の研究では、「様態・結果の相補性仮説」が提起され、単純動詞の場合、様態と結果の両方が単語の意味として含意されていないと指摘されている。本稿では、複合動詞は二つの単純動詞からなるものであり、様態と結果の両方を複合動詞の意味として同時に含意できるという立場を取っている。

一つの動詞に様態と結果をそれぞれ含んでいるかどうかは、Beavers & Koontz-Garboden (2012) を参照した上で、以下のようなテストでチェックする。

(22) キャンセル文

ア、様態動詞：Beavers & Knoontz-Garborden (2012) は「but didn't move a muscle」という判断テストを提出しているが、本稿もそれに従い、「筋肉はぜんぜん動かさない」という判断テストを用いる。ただし、この判断テストは最も典型的な様態（人が動いて何らかの動作を行う）の判断の場合にのみ適用される。(23) のように、その動詞が様態動詞であれば、それによって様態が指定されているので、「筋肉はぜんぜん動かさない」によって様態をキャンセルすることが不可能であり、そのような文は容認されない。

(23) * 太郎は走ったが、筋肉はぜんぜん動かさなかった。(様態)

(24) 太郎はガラスを壊したが、筋肉はぜんぜん動かさなかった¹⁶。(結果)

イ、結果動詞：Beavers & Knoontz-Garborden (2012) は「but nothing is different about it」という判断テストを提出しているが、本稿は、「何の変化も起きなかった」という判断テストを用いる。

(25) *太郎はガラスを壊したが、ガラスには何の変化も起きなかった。(結果)

(26) 太郎はテーブルを拭いたが、テーブルには何の変化も起きなかった。(様態)

(27) 結果構文への適合性

ア、様態動詞：適合しない

(28) *太郎は鉄を平らに叩いた (様態)

(29) *太郎は岸に泳いだ／漂った／這った (様態)

イ、結果動詞：適合する

(30) 太郎は皿を粉々に割った (結果)

(31) 太郎は岸に戻った／降りた (結果)

6.3. 「付帯状況」関係を表す複合動詞と複合動名詞について

由本 (2013) では、V2 に対して V1 が付帯状況を表す場合に、複合動名詞については V2 が働きかけや使役を表すとし、複合動詞については V2 が移動や位置変化¹⁷を表すと指摘されている (表 11)。

表 11. 複合動詞と複合動名詞における付帯状況を表す場合の V2

	V1	V2	例
複合動詞	様態	移動や位置変化を表す	這い上がる、舞い落ちる、這い寄る
複合動名詞	様態	働きかけや使役	押し売り、立ち読み、飛ばし読み

(由本 2013 : 116 - 117 よりまとめたもの)

第 5 節で示したように、付帯状況を表す複合動詞は生産性が低い上に、V2 のほとんどが移動

¹⁶ 太郎が超能力者であれば、体を動かさずに何らかの方法を使ってガラスを壊することができるような文脈が想定される。

¹⁷ 由本 (2013) で挙げられた移動動詞の例はこのほかに、「上がる」(自)、位置変化動詞は「入れる」(他)、上げる(他)、「つく」(自)、「出る」(自) などがある。LCS では、それぞれのテンプレートが区別して表示されている。移動動詞：[x MOVE]、位置変化動詞：[y BECOME [y BE AT <STATE>]]。

や位置変化を表す動詞である。表 11 に挙がっている例のほかに、「一回る」(動き回る、歌い回る、売り回る、転がり回る、転げ回る、探し回る...)、「一出る」(あふれ出る、歩み出る、浮かび出る、浮き出る、泳ぎ出る、転がり出る...)、「一去る」(奪い去る、駆け去る、消え去る、過ぎ去る、連れ去る、逃げ去る...)などの例が挙げられる¹⁸。また、由本(2013:117)は、付帯状況タイプの複合動詞を生産的に作る V2 とは、様態を特定しない移動や位置変化を表す動詞であると指摘している。

一方、本稿で集めた付帯状況を表す複合動名詞は、V2 が活動動詞もしくは達成動詞のいずれかに属している。具体的には、以下のように分けられる。

①「活動動詞」(x ACT (ON))

V2 が活動動詞に属している例としては、以下のような語が挙げられる。

(32) 押し洗い、しゃくり泣き、添い寝、叩き洗い、立ち聞き、立ち泳ぎ、掴み洗い、盗み聞き、放し飼い、踏み洗い、持ち逃げ、揉み洗い

②「達成動詞」[[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT z]]

V2 が達成動詞に属している複合動名詞は、V2 の表す意味によって、以下の5つのタイプに分けられる。

a.V2 が作成動詞である場合

(33) 崩し書き、添え書き、走り書き、まつり縫い¹⁹、盗み撮り

b.V2 が漸進主題変化動詞である場合

(34) 立ち食い、立ち読み、飛ばし読み、走り読み、回し飲み、拾い読み、立ち飲み

c.V2 が所有関係変化動詞である場合

(35) 切り売り、叩き売り、投売り、量り売り

d.V2 が再帰動詞である場合

(36) 重ね着

以下では、他動性調和原則を満たしている「活動動詞+活動動詞」(6.3.1節)と「達成動詞+達成動詞」(6.3.2節)、「活動動詞+達成動詞」(6.3.3節)を例として複合動名詞のV1とV2の意味特性を分析する。結論を先に述べると、これらの複合動名詞はV2が様態指定動詞であるという点で、複合動詞と異なっている。

¹⁸ 「一狂う」(「荒れ狂う」、「怒り狂う」、「踊り狂う」、「泣き狂う」、「酔い狂う」、「笑い狂う」...)、「一笑う」(「せせら笑う」、「含み笑う」)のような移動や位置変化を表さない例も含まれているが、数がかなり限られている。

¹⁹ 「縫う」は「カーテンを縫う」のように、作成動詞としても使われるが、「まつり縫い」は縫い方の一種であり、「まつり縫い」における「縫う」が作成動詞として捉えられるかは検討する余地が残っている。

6.3.1. 「活動動詞+活動動詞」の場合（例：「つかみ洗い」）

ここでは、「つかみ洗い」を例として、「つかむ」と「洗う」のそれぞれの意味特性を検討する。

(37) 「つかみ」と「洗う」との複合

「つかむ」と「洗う」は両方とも活動動詞であり、行為を表す様態動詞である。LCS で意味構造を表すと、次のようになる。

(38) 「つかむ」の LCS : [x ACT_{grasping} On y]

「洗う」の LCS : [x ACT_{washing} On y]

6.3.2. 「達成動詞+達成動詞」の場合（例：「崩し書き」）

次に、「崩し書き」を例に、「崩す」と「書く」のそれぞれの意味特性を検討する。「崩す」は自他交替できる典型的な状態変化動詞であり、CAUSE 関数で表す使役概念が含まれている。LCS は (39) のようになる。

(39) 「崩す」の LCS

[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [BE AT< DESTROYED >]]]

丸田（1998）は、「書く」の LCS を [[x ACT] CAUSE [y BECOME [BE IN-EXISTENCE]]] と表記している。つまり、「書く」は様態を指定せず、結果を指定している動詞だと考えられている。しかしながら、以下の (40) で示されている通り、6.2 節で述べたテストを用いて「書く」をチェックした結果から、本稿では「書く」は様態を指定していると考ええる。

(40) a. キャンセル可能

?太郎は字を書いたが、筋肉はぜんぜん動かさなかった²⁰。(様態)

*太郎は字を書いたが、紙には何も変化もない²¹。(結果)

b. 結果構文に適合する

「書く」と共起している修飾語の性質から説明する。「字を大きく書いた」は、「書いた字が大きい」という意味を表しており、「大きく」は「書く」という動詞の結果状態を表現している。つまり、「書く」が結果状態を含意していることが確認できる。これらのテストを通じて、「書く」は結果状態を含意していると同時に、様態も指定していると判断できる。

²⁰ 太郎が超能力者であるような想定ならば、このような場面もありうる。

²¹ ペンが壊れた場合、字を書いたが何も変化がない状況が考えられると査読者から指摘していただいた。ただし、ここで想定するのは、書くための条件が揃うならば、この文が不自然だと思われる。

(41) 「崩す」と「書く」の LCS

「崩す」: [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [BE AT< DESTROYED >]]]

「書く」: [[x ACT_{writing}] CAUSE [y BECOME [BE IN-EXISTENCE]]]

6.3.3. 「活動動詞+達成動詞」(例: 「叩き売り」)

「叩き売り」を例として説明する。「叩く」は活動動詞である。LCS は (42) のように表される。

(42) 「叩く」の LCS: [x ACT_{knocking} ON y]

「売る」の意味特性を以下のようにテストしておく。

(43) キャンセル可能

? 太郎は魚を売ったが、筋肉はぜんぜん動かさなかった²²。(様態)

* 太郎は魚を売ったが、魚には何の変化もない²³。(結果)

様態のキャンセルテストにおいて、様態のキャンセルが完全に可能というわけではない。このようなテストを通じて、「売る」は様態と結果を両方とも含んでいると考えられる。

(44) 「叩く」と「売る」の LCS

「叩く」: [x ACT_{knocking} ON y]

「売る」: [[x ACT_{selling}] CAUSE [z BECOME [z HAVE y]]]

以上をまとめると、複合動名詞において一番生産性の高い「付帯状況関係」の語は、V2 の様態が指定されている点で、複合動詞の「付帯状況関係」の語とは異なる。複合動詞には、「一狂う」(「荒れ狂う」、「怒り狂う」、「踊り狂う」、「泣き狂う」、「酔い狂う」、「笑い狂う」...)、「一笑う」(「せせら笑う」、「含み笑う」)のような様態が指定されている語が見られるが、そのほとんどは「他動性調和原則」を満たしていない²⁴。以上述べた結果を表 12 のようにまとめる。

²² ネットで売る状況ならば自然に使えるという指摘も得られているが、「売る」という動作がどこまでの行為を含むかに関係があるように思われる。ネットで売る場合には、売り手と買い手の直接のやりとりはないものの、「売る」という行為が完結するまでに、特定の関連行為が想定できるため様態として捉える。

²³ 魚の所有権は変わっているが、他の性質については変わらないと考えられる。ここでは所有権の変化も変化の一種と捉えている。

²⁴ 「荒れ狂う」のみが「他動性調和原則」を満たしている。

表 12. 「付帯状況関係」を表す語における V2 の意味特徴と生産性の対応関係

	V2	項構造の制約	生産性
複合動詞	様態指定	他動性調和原則を満たしていない	比較的低い
	様態未指定	他動性調和原則を満たしている	比較的高い
複合動名詞	様態指定	他動性調和原則を満たしている	比較的高い

7. 結論と今後の課題

本稿では、複合動詞と「V1+V2」型複合動名詞の生産性がどのように異なるのかに対して、次のように答える。複合動詞で生産性が一番高いのは「手段関係」で、「並列関係」が類似事象で生産性が低いのに対し、「V1+V2」型複合動名詞で生産性が一番高いのは「様態・付帯状況関係」で、「並列関係」が主に反義事象で生産性が2番目に高い。

また、「付帯状況関係」の語に絞って、このような違いがどのレベルの違いであるのか、また何によってもたらされるのかを分析した。その結果、両者とも生産性が高い語は「他動性調和原則」を満たしていることが示された。複合動詞と複合動名詞は、V2 が様態を指定しているかどうかという基準で分けられ、意味構造レベルの違いが見られた。複合動名詞では V2 が様態を指定しているのに対して、複合動詞では V2 が様態を指定していない。本稿は、先行研究で論じられている動詞複合語が意味構造のレベルの合成だという主張を支持する。また、これは日本語の複合動名詞の形成の動機付けが何なのかという問いの解決にもつながっている。

一方、以下のようないくつかの問題点がまだ残されている。なぜ「V1+V2」型複合動名詞には、V2 が様態指定動詞のほうが多用されるのか。また、「V1+V2」型複合動名詞において、「付帯状況」と「並列関係」の2つのタイプの LCS の結合はどのように統一的に捉えられるのか。さらに、本稿では扱わなかった、「他動性調和原則」に反する生産性が低い複合動名詞の例も考える必要がある。これらは今後の課題としたい。

参考文献

- Beavers, John and Koontz-Garboden Andrew (2012) Manner and Result in the Roots of Verbal Meaning. *Linguistic Inquiry* 43, 331-369.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT press.
- Bauer, Laurie (2001) *Morphological Productivity*. New York: Cambridge University Press.
- Levin, Beth and Rappaport Hovav Malka (1998) Building Verb Meanings. In: Miriam Butt and Wilhelm Geuder(eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 97-134. Stanford, Calif: CSLI Publications.
- Levin, Beth and Rappaport Hovav Malka (2013) Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity. In: Arsenijevic, Boban, Berit Gehrke and Rafael Marin (eds.) *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*, 49-70. Dordrecht : Springer.
- Rappaport Hovav, Malka and Levin Beth (2010) Reflections on Manner/Result Complementarity.

- In: Rappaport Hovav, Malka, Edit Doron and Ivy Sichel (eds.) *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, 21-38. Oxford : Oxford University Press.
- Tagashira ,Yoshiko and Hoff Jean (1986) *Handbook of Japanese Compound Verbs*. Tokyo: Hokuseido Press.
- 石井正彦 (1984) 「複合動詞の成立—V+V タイプの複合名詞との比較—」『日本語学』3(11): 81-94.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』東京：研究社.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (2008) 「語彙概念構造 (LCS) 入門」『レキシコンフォーラム』(4) : 239-264. 東京：ひつじ書房.
- 陳奕廷 (2015) 「日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズム —中国語との比較対照とあわせて—」神戸大学博士論文.
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』(43): 60-81.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』(114): 37-83.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー —語彙的使役動詞の語彙概念構造—』東京：松柏社.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』東京：ひつじ書房.
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」影山太郎編『複合動詞研究の最先端』: 109-142. 東京：ひつじ書房.

付録 「V1+V2」型複合動名詞の語形成タイプ

意味タイプ	語形成のタイプ	生産性
並列関係	開け閉め (達成+達成)、上げ下ろし (達成+達成)、上がり下がり (到達+到達)、上げ下げ (達成+達成)、上り下り (到達+到達)、行き来 (到達+到達)、浮き沈み (到達+到達)、売り買い (達成+達成)、送り迎え (活動+活動)、貸し借り (達成+達成)、切り張り (達成+達成)、出し入れ (達成+達成)、出入り (到達+到達)、伸び縮み (到達+到達)、抜き差し (達成+達成)、乗り降り (到達+到達)、見え隠れ (到達+到達)、見聞き (活動+活動)、満ちかけ (到達+到達)、寝起き (到達+到達)、やり取り (達成+達成)、読み書き (達成+達成)	二番目に高い (22語、30.6%)
付帯状況 (様態)	押し洗い (活動+活動)、重ね着 (達成+達成)、崩し書き (達成+達成)、切り売り (達成+達成)、しゃくり泣き (活動+活動)、添い寝 (到達+活動)、添え書き (達成+達成)、叩き洗い (活動+活動)、叩き売り (活動+達成)、立ち飲み (到達+達成)、立ち泳ぎ (到達+活動)、立ち食い (到達+達成)、立ち読み (到達+達成)、立ち聞き (到達+活動)、掴み洗い (活動+達成)、飛ばし読み (達成+達成)、投売り (達成+達成)、盗み聞き (活動+活動)、盗み撮り (活動+達成)、量り売り (達成+達成)、走り書き (活動+達成)、走り読み (活動+達成)、放し飼い (活動+活動)、拾い読み (活動+達成)、踏み洗い (活動+活動)、まつり縫い (活動+達成)、回し飲み (達成+達成)、持ち逃げ (達成+活動)、揉み洗い (活動+活動)	一番高い (29語、40.3%)
手段	買い食い (達成+達成)、着痩せ (到達+到達)、焼き討ち (達成+活動)	低い (3語、4.2%)
原因	討ち死に (活動+到達)、寝冷え (到達+到達)、ひき逃げ (活動+到達)	低い (3語、4.2%)
その他	当て逃げ (到達+活動)、受け売り (達成+達成)、卸売り (活動+達成)、追い炊き (活動+達成)、買い置き (達成+達成)、買いだめ (達成+達成)、食い溜め (達成+達成)、食い逃げ (達成+活動)、出稼ぎ (到達+達成)、寝泊り (活動+活動)、乗り逃げ (到達+活動)、寝だめ (到達+達成)、振り逃げ (到達+活動)、もらい泣き (達成+活動)、焼き増し (達成+達成)	低い (15語、20.8%)

The Difference in the Semantics of Formation between Compound Verbs and Verbal Compound Nouns in Japanese

LI Hui

lihui13041002@gmail.com

Keywords: compound verb, verbal compound nouns, Transitivity Harmony Principle, Lexical Semantic Structure, productivity

Abstract

Japanese is known to be rich in compound verbs consisting of two verbs joined together, such as *kiri-taosu* (cut and knock.down). The combination of two verbs also forms verbal compound nouns, such as *tati-yomi* (*suru*) (stand and read). This study has two goals: (i) to reveal the difference between the two types of compounds in terms of productivity and (ii) to explain where the difference comes from. The Lexical Conceptual Structure approach was chosen, because of its capacity to generalize the semantic structure of verbs. It has been found that the productivity corresponding to the different semantic relationships tends to be reversed between compound verbs and verbal compound nouns. This study focuses on compounds where V1 and V2 occur simultaneously, which is the most productive pattern. It will be shown that manner is not specified in V2 for the compound verbs, while manner is specified in V2 for verbal compound nouns. It will also be argued that the compound verbs and verbal compound nouns are subject to the same constraints on the argument structure, but the semantic structure brings about the difference between the two types of compounds.

(り・けい 東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員)